

SENRI NEWS LF

千里ライフサイエンス振興財団ニュース

CONTENTS

- 1 対談 国立民族学博物館長 梅棹忠夫氏/
千里ライフサイエンス振興財団理事長 岡田善雄氏
- 5 千里ライフサイエンスセンター
プロジェクトのご紹介
- 7 千里LFレポート
「財団設立記念講演会の報告」
- 9 TOPICS
- 10 INFORMATION



21世紀に向かって走りだした 千里ライフサイエンス振興財団

産・学・官のフェイス・トゥ・フェイスの交流が ライフサイエンスの無限の可能性を生み出す

ライフサイエンスを中心に、21世紀をリードする学術・文化都市として期待される千里。その千里に産声をあげた財団に、今何が期待されているのか。第1回目の対談では、ライフサイエンスの草分け的存在である民族学者の梅棹忠夫氏を迎え、岡田善雄財団理事長とともに財団設立の背景を鋭く分析しながら、ライフサイエンスを育む理想的土壌づくりの可能性を探ってみました。

驚くべき頭脳集積都市・千里、まずはその誕生物語

梅棹 千里という地は、私には因縁の深いところですね。京都から家内の実家のある神戸へ行くのに西国街道をよく往復しました。竹藪と雑木林しかなかったころです。大阪府の企業局がここをニュータウンにしようとしたとき、私はその計画段階から知っていました。

岡田 その当時は、先生は大阪市立大学におられたんですね。

梅棹 そう、ずいぶん昔の話です。ニュー

タウンの造成が始まったのは1960年頃ですから。このニュータウンづくりは北摂に大中心都市をつくるべく始まったもので、単なる大阪のベッドタウンという思想ではなかったんです。つまり、副都心ではなく、独立都市です。私はいまや近畿は京阪神千の4都だとおっしゃっているんですが、ここはそういう性格のところなんです。万博のためにここをつくったと誤解している人も多いようですが、決してそうではない。

岡田 阪大では微生物病研究所が最初に移ってきたんですが、その当時は、雨が

降ったらドロドロになるし、昼飯を食べにくいところもないですね。しょうがないから空港まで食べに行っていました(笑)。

それが今では、各種研究機関が集積する地として東京の筑波と並び称せられるほどになった。

梅棹 現実の成果としては、東西に驚くべき2つの頭脳集積点ができたわけです。アメリカのマサチューセッツと南カリフォルニアという頭脳の2大集積点に匹敵するものです。ただ千里と筑波の違いというのは、筑波は東京都の疎開のためにつくられたもので、人があまり住んでいない。しかし千里の場合は、もともと住宅で始まっていますから定着者が多いんですよ。

私がここへ移ってきたのは、国立民族学博物館を引き受けた最初の年でした。住んでみて初めてわかったんですが、日

本の2大自動車道がここでクロスしていて、インターチェンジがいくつもある。さらに国際空港がある。つまりここからだと、日本全国ほとんどの大都市へ1~2時間で行けるんです。住んでみれば、ここは日本のヘソだったわけです。そういうことを私があんまり言ったもので新聞が取り上げ、それが千里界隈の地価を高騰させる一因になったとか(笑)。



フレキシビリティが ライフサイエンスを育んだ

岡田 先生はもともと動物生態学がご専門でいらっしゃるわけですが、ずいぶん早い時期からライフサイエンスの分野で活躍なさっていらっしゃる。まさにライフサイエンスのハシリだとお見受けしておるんですが、どんなプロセスを経てこうなられたのでしょうか。

梅棹 終戦の2年くらい前、学術探検隊に加わってモンゴルに行きましたが、そこで牧畜のエコロジーを研究するうちに、家畜より人間の方がおもしろそうだ



梅棹忠夫氏プロフィール

1920年、京都市生まれ。43年京都大学理学部卒業後、大阪市立大助教授、65年から京大人文科学研究所助教授・教授を経て、74年国立民族学博物館長に就任、現在に至る。動物生態学から民族学に転じ、57年『文明の生態史観』で独自の説を打ち出し反響を呼ぶ。以後、実証的な比較文明学の確立に尽力。86年失明後も月1冊のペースで著作を刊行『月刊うめさお』の異名をとる。『知的生産の技術』『日本とは何か』『情報の文明学』など著書多数。現在『梅棹忠夫著作集』全15巻(中央公論社)を刊行中。朝日賞、フランス共和国パルム・アカデミック勲章コマンドゥール章など多数の受賞に続き、88年紫綬褒章、平成2年度国際交流基金賞を受賞。

ということになり、ズルズルと民族学の方へ変わったというわけです。

岡田 当時はまだ、その分野はちゃんと確立されていなかったのでは？

うのは絶対に儲かることはない分野でしたから、純粋に興味でやれたんですね。

しかし今は、サイエンスの相当部分が社会に直結するという形になり、しかもサイエンティストの数が増えていますから、好きでノンプロフィットではどうにもならない。対社会的に生きていく方便として、好き嫌いとは違う次元で判断せざるをえなくなっています。その意味では、今の若い人はかわいそうですね。まあ各人で、好きなところをちょっと残して、あとはデューティとして割り切るという工夫をしなきゃならないんでしょうね。

梅棹 私は、初めから好きで学問やってきましたからね。私が動物学教室に入ったときは、募集人員5人に対して入学者は私1人。当然、首席で卒業しました(笑)。

大学とは本来、功利的ベクトルを否定するところ

岡田 京大というところは、いかにもお公卿さんだと思っただけですよ。日本の大学では存在しえないような、つまりプロフィットに結びつかないような非常にユニークな分野でもずっとキープできている。

梅棹 たとえば文学部にサンスクリット関係だけでも、梵文学、仏教学、インド哲学の3つがあります。これなんか常識では考えられませんね。絶対就職口がないんだから(笑)。

岡田 京大とのコントラストからいく



岡田善雄氏プロフィール

1928年、広島県生まれ。52年大阪大学医学部卒業後、阪大微生物病研究所助手、助教授を経て72年教授に就任。1982-87年細胞工学センター長。現在、同センター教授および岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所評議員を務める。専門は分子生物学で、特殊なウイルス(センダイウイルス)を使うと細胞融合が人為的に行なわれることを見出し、57年に世界初の細胞融合に関する論文を発表し、世界的な反響を呼ぶ。これらの先駆的業績により、朝日賞、武田医学賞、日本人類遺伝学会賞をはじめ数々の賞に輝き、87年には文化勲章を受賞。



と、対極にあるのは阪大でしょうね。京大、東大は日本の顔で、ある意味では寝ていても生きてゆける。一方、阪大は昭和初期の経済恐慌の余韻がまだ残っている頃、地元の熱意で創立され、その資金の殆どが大阪府と大阪財界で賄われたという特異な歴史を担っています。大学の人たちも、何か自分たちで工夫を行かなければ生きてゆけないと思っている、という面白い旧帝大です。活性化の工夫を自主的にやっていく気風が今も続いています。社会との連動性が特徴です。

梅棹 私か最初に勤めました大阪市立大学は、気風から言えば京大的でしたね。それでも市大から京大に帰ったときは、ほんとに自由を満喫しました。人文科学研究所の社会人類学の助教授として帰ったんですが、この研究所は不思議なところでね、何をやってもいいというんです。のびのびと学問しましたねえ。

岡田 その人を信頼して自由に学問させてくれ、結果は問わないというのが、良

き時代の大学の姿だった。その存続をどう工夫するかが、現在問われているのでしょう。

**人材疎外の一番の被害者
やる気ある若者を救え!**

岡田 この民族学博物館ですが、国立でありながらこれほどのことができるのかと、いつもびっくりするんですが。

梅棹 この建物は完全なインテリジェントビルになっていて、コンピューターの端末は定員の数より多いんです。コンピュータリゼーションは最初から予想していましたので、積極的に導入してきました。完成すると100万冊を収納できる民族学の専門図書館もすべてコンピュータ

ーで管理されます。

岡田 国立大学の図書館も今は光ファイバーでやっています。ところが、一般の図書館はガンとして受け付けない。結局予算措置が全部縦割りで行っているからです。たとえば文部省系列と通産省がらみ、それらの横つなぎを省レベルでOKとろうと思ったら、これはもうたいへん難しい。だから現場の末端レベルで工夫しなければならない。うまくいかどうかは、この工夫しだいで決まると思うんです。

千里ライフサイエンスに対する大学側の期待は、ひとつにはどこかに風穴を見つけ、そこで工夫することによって若いやる気のある連中をエンカレッジしてほしい、ということがあるんですね。

梅棹 大学には人材が豊富にある。ところが組織が悪い。その人材を大学のワク



●国立民族学博物館
民族学の研究機関でもあり同時に一般向けの博物館という2つの機能を合わせ持った、国立大学共同利用機関の中でもユニークな研究博物館。昭和49年6月に設立。コンピューター・システムの完備された専門研究施設を研究者に提供するとともに、『国立民族学博物館研究報告』『民博通信』『月刊みんぱく』『季刊民族学』などの刊行物を始め、各種セミナー、シンポジウムなどを通じ、民族学の最先端の研究成果を一般にも公開。情報サービスは専門家にとどまらず、一般市民にもフィードバックされている。

また、ミュージアム・ショップやレストランなどもあり、市民の憩いの場としても親しまれている。

●大阪大学 細胞工学センター
新しい生命科学の急速な発展に対応し、共通目的を持つ既存の研究グループを大学の学部のワクを越え、再編成しようという試みから設立された画期的な研究機関。いくつかの科学分野(細胞生物学、免疫学、遺伝現象の化学的解明を目指す遺伝学など)が相互協力し、学内研究者が共同利用するという目的で大阪大学微生物病研究所並びに医学部の協力のもと、昭和57年4月に設立された。さらに10年を経過した時点でセンターを再評価し、有効な組織へと柔軟に対応するといったフレキシブルな発想が各界の注目を集めている。岡田理事長は同センター、ヒト体細胞遺伝生理学部門研究グループの教授でもある。



から救いだし、別にオーガナイズすることを考える必要があります。各種のシンクタンクがいい例です。新しい組織をつくって研究者を自由に使って研究し、それが終われば解散する。そういう方法を考えないとね。

岡田 しかし、明治からのパターンで、動きがとれない。

梅棹 タコツボ化が進んでいますね。垣根を越えた自由な交流がほとんどできていない。学者の生活保障が行き届いて安定していることも、その一因かも知れませんが。

岡田 それだけ平和ということなんですが、学問が好きで意欲的な人をスポイルする状況にあるというのは大問題です。大学だけでなく企業にもたくさんあります。たとえば特許申請ですが、つまらないことにエネルギーを使わざるをえないという状況があるわけです。この問題も千里ライフサイエンスあたりで、それぞれの専門家や現場の人を集めてなんとか改善したいと思いますね。

先日、利根川(進)君と話したんですが、若い人がスポイルされる方向にシステムが動いている状況に対して彼が一生懸命主張したのは、6年間自由に実験させるアシスタントプロフェッサー制度をつくれ、ということなんです。わかってはいることですが、先生がここ(国立民族学博物館)をつくられたときに準備された同等の大きな準備がないと、総論やられても手も足も出んのですなあ(笑)。

**研究者よ、
垣根を越えて外に出よう!**

梅棹 去年から総合研究大学院大学をや



りだしたら、次から次と煩瑣なことがいっぱい出てきて困っておるんですよ。大学という形をとっているからには、教授会や評議会をつくらなきゃいけないとかね。

岡田 民主主義は会議が好きですからね(笑)。会議をすることで一人の人間が責任をとらなくてもすむんですよ。

梅棹 それも江戸時代の幕藩体制以来の伝統です。

岡田 (千里ライフサイエンスでは)責任者がはっきりするようなかたちでやりたいんですけどね。責任もとるかわりに自分の意志でなにかをやる、そんな権限を持つ責任者という意味ですね。

アメリカあたりではディーンとかね、その対応をどんどんやることで大学に寄付がくる。そうすると新しいプロジェクトを自分で企画してやれるわけです。日本でも各大学の学長とか学部長とかにそういう権限を与えたら、もっとがんばれる人も出てくるはずですよ。

梅棹 千里ライフサイエンスの活動で、いずれ大学外で仕事が始められるようになります。それは是非、やってくださいよ。

岡田 建物が建つのは2年先ですが、産・学・官のフェイス・トゥ・フェイス

の交流の場として20階と21階につくるサロンには、私自身非常にこだわっていますね。どういう形にするか、だいたいのパターン化はできているんですが、オープンまでにじっくり練って、ぜひとも成功させたいと思っています。

梅棹 北摂7市3町の知識人たちが垣根を越えた交流を図ろうという目的で、岡田先生も含めた約80人で『千里眼』という同人誌を発行していますが、これは役に立つのではないかと思います。結局、人ですな。人を捉まえて、フルに力を発揮してもらうようなシステムをつくることです。

岡田 それが一番難しいんですけどね(笑)。ほんとに今日は長時間、ありがとうございました。

千里LCビル
完成予想図



ライフサイエンスの
国際交流拠点
千里ライフサイエンスセンター

国際的なライフサイエンスの拠点を目指して

— 千里ライフサイエンスセンタープロジェクトの概要 —

近年、ライフサイエンス分野における研究開発の進展は目覚ましく、資源・エネルギー・医療・環境などの地球規模の問題解決に大きな役割を果たすものと期待されています。千里ライフサイエンスセンタープロジェクトは、財団千里ライフサイエンス振興財団が千里ライフサイエンスセンターと緊密な連携・協力のもと、研究者および研究開発担当者の交流のための施設・機会を提供し、情報の交流・受信拠点として大阪ひいては我が国の研究開発の高度化、国際化に寄与することを目指すものです。

1 産・学・官の協調を基盤に

千里ライフサイエンスセンター構想は、昭和56年頃から故山村雄一氏(当時・大阪大学学長)の指導のもと、民間企業の私的な研究会に大阪府がオブザーバー参加して温めてきたものです。当初から産学官の交流、特にサロンや会議施設の充実、情報の受発信に力点を置いており、この点が本プロジェクトの基本的性格であり、交流促進を目的とする施設がリサーチコア、特定施設の過半を占めています。

事業主体は、(株)千里ライフサイエンスセンターと(財)千里ライフサイエンス振興財団との二本立てとしています。両法人格の特徴を生かし、第3セクターである株式会社がビルを建設・保有し、財団が大学との連携を確保しながら特定施設の運営を中心とする公益的活動の主体になるというものです。この二本立て自体が、新しい試みであるといえましょう。

2 ライフサイエンスのメッカとして

国土の多極分散化を実現するため、近畿の最も得意とするライフサイエンス分野の一層の活性化を図るのがこのプロジェクトの眼目です。関西には、国内有数のライフサイエンス系の産業基盤があり、例えば、製薬大手(資本金100億円以上)11社中8社までが大阪市に本社を置き、その他の大小関連企業と共に一大集中をなしています。また灘・伏見以来の醸造系産業の伝統も顕著です。

そして関西の学界には、基礎研究重視の学風と、適塾以来の実学の伝統があります。特に北大阪地域には大阪大学をはじめ、国立循環器病センター、大阪バイオサイエンス研究所、蛋白質工学研究所などの有力研究機関が既に立地し、さらに大阪大学医学部及び同附属病院の千里地区への移転工事が進行中です。また千里の後背地というべき茨木・箕面丘陵に計画中の「国際文化公園都市」は、有力企業数社の研究所用地が確保される等「ライフサイエンスパーク」として構想されており、これらを併せて、国際的にも顕著な高度集積をなすこととなります。

3 千里LCビルの特徴

千里LCビルの最上階には、本プロジェクトのルーツというべきサロンを設けます。我が国では、職域を越えたインフォーマルな人的交流は個人の努力、負担に委ねられ、時には偏見をもって見られがちです。ライフサイエンス分野の総合的な発展のためにも、この種の施設が求められています。軽飲食、セクレタリー、サロンマスターによる紹介等のサービスのほか、定例的なフォーラムを催し著名な碩学はもとより、関連分野や異業種の若手研究者まで気軽に集まり、談笑の場から互いに研究開発のニーズ、シーズ、ヒントを汲み取れる場とするものです。

そして5階～11階の中層部分には民活法に基づく特定施設として、国際会議に対応した会議室、プラザ展示場、データベースのアクセス実習も可能な研修センター、オープンラボ、ビジネスインキュベータなどを整備します。

12階～19階の高層部はビジネスセンターとしてオフィス仕様の賃貸部分、1階～4階までの低層部は商業施設として飲食店プラザ・アスレチック等を設けます。これらはリサーチコア特定施設を採算面で補完すると共に、関連企業の入居やビル内居住者へのサービス向上を目指したものです。

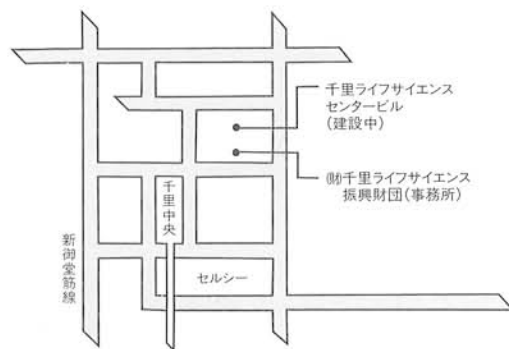
千里LCビルの敷地は約6000㎡、ビルの地下部には財団法人大阪府千里センターが約300台収容の公共駐車場を建設、運営します。駐車場部分を含めた延床面積は約51000㎡、地上21階建ての約100mの高層インテリジェントビルで、平成元年12月に着工、平成4年6月末の竣工を目指して現在工事中です。

4 ソフト面を財団がサポート

リサーチコアの運営主体となる財団法人は、いわば本プロジェクトのソフト面を担当します。本財団の特徴は、大学特に国公立大学との連携です。理事長をはじめ財団役員としては大学人の運営への直接的な参画を求めるほか、シンポジウム・セミナーの企画・運営等各種の委員会に様々なクラスの大学人の関与を求めます。一方民間企業には研究協力の斡旋等の各種のサービスを行い、大学との連携を多角的に追求します。

本財団は平成2年7月、基本財産約20億円の財団として大阪府より設立許可されました。当面はビル竣工後の本格的なライフサイエンス振興事業のための基礎がためを行い、基本財産の一層の充実と活動基盤の拡大のため、全国、海外の関係企業の参画を求めて参ります。

■名 称 財団法人 千里ライフサイエンス振興財団
 ■設立年月日 平成2年7月31日
 ■事務所の所在地 〒565 大阪府豊中市新千里東町1丁目4番1号
 阪急千里中央ビル9F
 TEL06-871-5535 FAX06-871-5530



- 事業概要
 ライフサイエンスに関する次の事業を行なう。
- 産・学・官連携・交流の促進
 - フォーラム、サロンの運営及び企画
 - シンポジウムの開催及び企画
 - 展示場の運営、展示の企画及び実施
 - 情報の収集及び提供
 - 研究者、研究補助者の人材育成
 - 開放型研究施設の設置及び運営
 - 研究開発型企業の育成及び支援
 - 研究の助成及び支援
 - 研究及び調査
 - 知識及び思想の総合的な普及啓発
 - 千里ライフサイエンスセンタービルの諸施設の運営
 - その他、この法人の目的を達成するために必要な事業

●役員及び顧問

役職名	氏名	所 属	役職名	氏名	所 属
理事長	岡田 善雄	大阪大学 細胞工学センター教授	理事	谷井 昭雄	松下電器産業株式会社 代表取締役社長
副理事長	梅本 純正	武田薬品工業株式会社 代表取締役社長	理事	谷川 秀善	大阪府 企画調整部長
副理事長	尾前 照雄	国立循環器病センター 総長	理事	千畑 一郎	田辺製薬株式会社 代表取締役社長
副理事長	中川 和雄	大阪府 副知事	理事	津室 隆夫	株式会社大林組 代表取締役社長
専務理事	田口 敬雄	大阪府 理事	理事	富田 一弘	大塚製薬株式会社 専務取締役
常務理事	中尾 義雄	株式会社千里ライフサイエンスセンター 常務取締役	理事	中島 浩司	株式会社千里ライフサイエンスセンター 専務取締役
理事	安部川浩夫	株式会社大和銀行 代表取締役頭取	理事	西塚 泰美	神戸大学 医学部教授
理事	池原 森男	株式会社強白工学研究所 所長	理事	早石 修	財団法人大阪バイオサイエンス研究所 所長
理事	石王 道男	財団法人大阪府科学技術センター 専務理事	理事	林原 健	株式会社林原 代表取締役社長
理事	宇野 敬	社団法人関西経済連合会 会長	理事	福井 三郎	京都大学 名誉教授
理事	大西 正文	大阪瓦斯株式会社 代表取締役社長	理事	藤澤友吉郎	藤澤薬品工業株式会社 代表取締役社長
理事	川上 智郎	住友電気工業株式会社 代表取締役社長	理事	藤原 富男	大日本製薬株式会社 代表取締役社長
理事	川瀬 太朗	日本生命保険相互会社 代表取締役会長	理事	別府 裕彦	東京大学 農学部教授
理事	河村 嘉典	三井株式会社 代表取締役社長	理事	松本 圭史	大阪大学 医学部長
理事	岸本 忠三	大阪大学 細胞工学センター教授	理事	森井 圭二	関西電力株式会社 代表取締役社長
理事	清池 一也	株式会社池田銀行 代表取締役頭取	理事	久吹 高壽	大阪府立大学 学長
理事	恩澤 洋	株式会社日本興業銀行 代表取締役頭取	理事	山田 康之	京都大学 農学部教授
理事	鴻池 藤一	社団法人大阪工業会 会長	理事	湯浅 敬三	財団法人千里文化財団 専務理事
理事	小林 公平	阪急電鉄株式会社 代表取締役社長	理事	吉利 一雄	塩野製薬株式会社 代表取締役社長
理事	近藤 雅臣	大阪大学 薬学部教授	理事	渡辺 潤	株式会社三和銀行 代表取締役頭取
理事	齋藤 正男	東京大学 医学部教授	監事	清西 良介	大阪府 出納長
理事	佐治 敬三	短歌工芸会 会長・ヤマトリー株式会社 代表取締役社長	監事	真木 富裕	社団法人関西経済連合会 常務理事
理事	志村 令郎	京都大学 理学部教授	顧問	石坂 公成	米・ジョンズホプキンス大学 教授
理事	杉村 隆	国立がんセンター 総長	顧問	梅村 忠邦	国立民族学博物館 館長
理事	高久 史磨	国立病院医療センター 院長・東京大学 医学部教授	顧問	利根川 進	米・マサチューセッツ工科大学 教授
理事	賀 外夫	株式会社住友銀行 代表取締役頭取	顧問	花房秀三郎	米・ロックフェラー大学 教授
			顧問	チャールズ・ワシントン	スイス・チューリッヒ大学 教授



財団法人千里ライフサイエンス振興財団
設立記念講演会開催

21世紀のライフサイエンスに向けて



岡田 善雄氏 財団法人千里ライフサイエンス振興財団理事長
大阪大学教授・細胞工学センター
阪大微生物病研究所助手、助教授、教授を経て、1982～87年細胞工学センター長に。1957年初の細胞融合に関する論文を発表、世界的反響を呼ぶ。文化勲章他数々の賞を受賞。



田村 修二氏 通商産業省・大臣官房審議官
1964年東京大学工学部卒業後、札幌通商産業局商工部長、埼玉大学教授、資源エネルギー庁石油部精製課長を経て、89年大臣官房審議官(基礎産業局担当)に就任。



松原 謙一氏 大阪大学教授・細胞工学センター長
1966年東京大学理学部化学科卒業。金沢大学・九州大学助手・大阪大学・助教授・教授を歴任。82年大阪大学細胞工学センター教授となり現職に。B型肝炎ワクチン開発で厚生大臣表彰。現在、HUGO推進に全力投球。



森本 哲郎氏 東京女子大学教授
東京大学文学部哲学科、同大学院社会学科卒。朝日新聞東京本社入社、学芸部次長、「週刊朝日」副編集長、朝日新聞編集委員を経て1976年退社。以後評論家として著述を中心に活動。現在東京女子大学教授。近著「ある通商国家の興亡—カルタゴの遺書」はベストセラーに。

21世紀の課題を解く鍵、ライフサイエンスに あらためて熱い期待が込められて

財団法人千里ライフサイエンス振興財団の設立を記念して、去る9月20・21日の2日間、千里阪急ホテルにおいて記念講演会を開催いたしました。講師および各講演を取りまとめたいただいた座長には、本財団の理事を始めそれぞれの専門分野で第一人者として世界的に活躍しておられる方々をお招きしました。それでは2日間にわたる講演会の模様を、駆け足でレポートしてみましょう。



今堀 和友氏 三菱化成生命科学研究所長
1944年東京帝国大学理学部化学科卒業。東大教養学部・農学部・医学部教授を歴任後、東京都老人総合研究所所長を経て66年より現職。84年紫綬褒章受賞。東大名譽教授。岡崎国立共同機構基礎生物学研究所評議員も兼任。



西塚 泰美氏 神戸大学教授・医学部
1957年京都大学医学部医学科卒業。同学部助手・助教授を経て神戸大学医学部及び理学部教授に就任。米国ハーバード大、スタンフォード大の客員教授も。シグナル伝達のバイオニアとして、文化勲章他数々の賞を受賞。現在、英国学士会員。



宮田 満氏 日経バイオテック編集長
1977年東京大学理学部植物学教室卒業。同大学院修士課程終了後、日本経済新聞社入社。日経メディカル編集部を経て、日経バイオテック創刊に携わる。通産省バイオテクノロジー振興委員会委員も務める。



岡田 節人氏 岡崎国立共同研究機構機構長
京都大学理学部等で動物学を修め、1984年同大学院理学部教授を退任。その後岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所所長となり、89年から、同研究機構の機構長。京都大学名誉教授。89年ハリソン賞受賞。90年、紫綬褒章受賞。

バイオ技術が拓いた ライフサイエンスの未来

9月20日午前10時、500人の参加者で埋まった会場に、ピンと張りつめた空気が流れました。まず、岡田理事長が開会の挨拶として、財団の設立経過や事業内容を紹介し、特に、このプロジェクトに非常な熱意を傾けて指導して来られ、設立の直前に惜しくも他界された山村雄一先生の功績が讃えられました。続いて通産省大臣官房審議官・田村修二氏ならびに大阪府知事・岸昌氏(企画調整部長・谷川氏代読)からの来賓祝辞をいただき、10時15分、いよいよ講演会の始まりです。トップは、財団理事長であり大阪大学教授の岡田善雄氏の基調講演、座長は同大学薬学部の近藤雅也教授です。「ライフサイエンス振興への工夫」というテーマで、「天の時、地の利、人の和」を結集して、産学官が横断的に連携交流することで創造的な研究成果を生み出すという方

法論や、これまでの特異性を根拠にしたリジッドな学問に対して、生物特有の「揺らぎ」あるいはアナログ・非線形の考察が提唱されました。例えばこれによる脳の研究によって、高齢化する社会の抱える老人痴呆の問題解決にも大いに貢献することが出来ましよう。

2番目の講演者は三菱化成生命科学研究所の今堀和友所長で、座長は大阪大学医学部長・松本圭史教授です。「高齢化社会におけるライフサイエンス」というテーマで、人間の機能はなぜ年齢により低下するのか、細胞死はプログラムされているのかといった、非常に興味深い問題をスライドで解説していただきました。細胞の生と死を支配するものを解明することこそライフサイエンスの当面の課題であるということですが、人類の願いの一つ「不老」へのチャレンジといえるかもしれません。

昼食をはさんで午後の部に入り、来賓祝辞をいただいた通産省大臣官房審議官・田村修二氏が演壇に立たれました。座長は田辺製薬㈱取

締役・応用生化学研究所長の土佐哲也氏です。テーマは「21世紀への挑戦・バイオインダストリー施策の新展開」。わが国の研究開発のやり方はまずマーケットを育てるボトムアップ型で、これが世界に冠たるエレクトロニクス産業を育てた。バイオインダストリーをこれに次ぐ産業に育てるため、通産省は4つの施策を具体的に展開していこうとしていると、力強く述べられました。

シグナル伝達のバイオニア、ノーベル賞に最も近い人、と岡田善雄座長の紹介で演壇に上がったのは神戸大学医学部教授の西塚泰美氏です。テーマは「生体における情報伝達の仕組み」。友人である世界の科学者たちのスナップ写真をおり混ぜたユーモアのあるスライドで、情報伝達の仕組み発見の経緯や今後の方向を語っていただきました。

初日最後の講演は、大阪大学教授・細胞工学センター長の松原謙一氏で、テーマは「DNA研究の進展とヒト・ゲノム解析計画について」です。座長は京都大学教授・前化学研究所長の高浪満

氏。ヒト・ゲノムの遺伝情報は30億文字にも達するといわれ、この気の遠くなるような全体像を把握しようとするのがヒト・ゲノム・プロジェクト(HGP)で、これを国際的協調の下に進めようと結成された任意団体HUGOの活動に、目下、松原先生は全精力を傾けていらっしゃるということです。

さて、第1日目のプログラムはこれで終了し、5時から懇親会です。最新情報をギッシリ詰込み緊張しっぱなしだった頭と体にお酒がほどよくしみわたり、一変リラックスした会場にはあちこちで交流の輪が広がりました。この日、新しい交友関係もたくさん生まれたことでしょう。

人類にはいま、第3の パラダイムが必要だ

2日目、9時。講演は日経バイオテック編集長・宮田満氏の「バイオ産業の夢と現実」で始まりました。座長は財団法人千里ライフサイエンス振興財団中尾

義雄常務理事です。21世紀には4～6兆円市場に成長するといわれるバイオ産業を真のクオリティ・オブ・ライフにつなげるには、今後ますます私達の意志や社会の知恵を総動員することが必要になる、と現実面での対応の重要性を強調されました。

ところで2日間の講演の中で唯一文化系の講師だったのが、次に登場された東京女子大学教授・森本哲郎氏です。座長は大阪科学技術センター専務理事の石王道男氏です。人間とは因果を探索するものであり、事実の因果を探索する自然科学はめざましい進歩を遂げたが、一方、価値の因果の探索は目をおおむものがある。事実と価値、この2つの領域を包み込む第3のパラダイムを確立しないと、人類に幸福はもたらされないだろう。——「科学と人間」というこの講演の中で鳴らされた警鐘は、500人の聴衆の胸深くに確実に余韻を残したことでしよう。

さて、講演会の最後を賑やかに盛り上げてくださったのが岡崎国立共同研究機構長の岡田節

人氏です。座長のバイオインダストリー協会会長・福井三郎氏の紹介によると、工学部の学生まで岡田先生の講義を聴きに抜け出すほどおもしろい講義だったとのこと。漫談言葉が飛び出したりスライドにご本人や漫画が登場したり、本日の講義「バイオの時代と伝統的生物学の進歩」もたいへん楽しく聴講できました。伝統的な生物学のテーマは、生物の形態づくりを分子の言葉で説明できる今、新しい技術であらためて追求する時代に入ったそうです。

以上で2日間にわたった講演は終了し、田口数雄財団専務理事の「財団活動がライフサイエンスにおける産・学・官連携の新しい姿を示し、我が国の研究開発の高度化・国際化の進展に必ず重要な役割を果たすものと確信する」という挨拶をもって、12時40分、閉会しました。

このあと、参加希望者による蛋白工学研究所、大阪バイオサイエンス研究所の見学会が持たれました。

■第1回理事会開催

千里ライフサイエンス振興財団の第1回理事会を平成2年9月7日、千里阪急ホテル「仙寿の間」にて開催致しました。当日はまず、財団設立に至る経過報告と設立発起人総会にて承認された平成2年度事業計画ならびに収支予算について報告致しました。

続く議案の審議では、引き続き、理事増員、評議員選任、理事の互選による常任理事選任、諸規定制定、役員報酬などの、それぞれこの財団の基本に係わる事項について、いずれも満場一致を持って決議され、ライフサイエンスの振興のため活発な活動を開始すべき態勢が整いました。

■財団設立記念講演会開催

財団設立記念講演会「21世紀のライフサイエンスに向けて」を9月20、21の両日に渡り千里阪急ホテルにて開催し盛況のうちに幕を閉じました。詳細は本号の特集記事をご覧ください。

理事会終了後には、理事会で選任された評議員や財団設立に際し尽力された関係者を交えて懇親会を開催。席上では岡田理事長の挨拶に続いて官を代表して大阪府の中川副知事による祝辞、さらに株式会社千里ライフサイエンスセンター小林社長の乾杯の発声で、なごやかに歓談が進みました。



■プロジェクト紹介ビデオ制作

㈱千里ライフサイエンスセンターによる千里ライフサイエンスセンタープロジェクト紹介ビデオの制作が、平成2年12月の完成を目標に順調に進行中です。完成時には財団関係者にも披露予定。各界著名人のインタビューや千里周辺のロケーション、空撮を完了し、現在編集が行われています。

セミナー開催のお・知・ら・せ

千里ライフサイエンスセミナー ブレインサイエンスシリーズ
—— 第1回 ——

『神経伝達機構』

本シリーズは、第一線の研究者、研究企画・開発担当者、更には本分野に興味をお持ちこれから研究を始めようとしている方々を対象として企画したものです。第一回は、「神経伝

達機構」をテーマに当該分野の著名な先生方をお招きしてご講演頂き、併せて自由に討論頂く質疑応答の時間も設けました。是非ともこの機会をお見逃しなく奮ってご参加下さい。

■日時	平成3年3月15日(金)午前10時～午後4時	■定員	100名(定員になり次第締切)
■場所	信用保証ビル3F(地下鉄御堂筋線千里中央駅すぐ) (大阪府豊中市新千里東町1-2-4 TEL 06(835)2715)	■受講料	主催・協賛団体会員……………5,000円 一般(非会員)……………7,000円 大学関係……………3,000円 (講演要旨集含む)
■主催	財団法人千里ライフサイエンス振興財団	座長	大阪市立大学医学部教授 高木 宏 氏
■協賛	株式会社千里ライフサイエンスセンター		

時 間	講 題	講 師
10:00～10:45	21世紀を迎える神経科学の展望	理化学研究所国際フロンティア研究システムチームリーダー 伊藤 正男氏
11:00～11:45	神経伝達物質の受容体と受容機構	京都大学医学部附属免疫研究施設長・教授 (千里ライフサイエンス振興財団評議員) 中西 重忠氏
12:00～13:00	昼 食 休 憩	
13:00～13:45	神経細胞の情報伝達と細胞骨格	東京大学医学部教授 廣川 信隆氏
14:00～14:45	受容体の薬理学	京都府立医科大学教授 栗山 欣彌氏
15:00～15:45	神経伝達物質と受容体	大阪大学医学部教授 (千里ライフサイエンス振興財団評議員) 遠山 正彌氏

■今後の予定 ブレインサイエンスシリーズとして『痴呆』『神経系の発生と分化』『記憶・学習』『脳と免疫』『脳の高次機能』『非侵襲性手段を用いた解析』等のテーマで予定しています。

*当財団では一般市民向けの公開講座も予定しております。

—— 市民公開講座「成人病シリーズ」第1回「血圧」 ——

■日時	平成3年3月9日(日) 13:30～17:00	■講師	尾前 照雄氏(国立循環器病センター総長・当財団副理事長)
■場所	千里協栄生命ホール		荒川規矩男氏(福岡大学医学部教授)
■問合せ	当財団		家森 幸男氏(島根医科大学教授)

■千里LCビルの建設状況

千里ライフサイエンスセンタービル(以下千里LCビル)は着工後1年を経、基礎工事、地下部分の鉄骨工事を終え、11月より地上部分の鉄骨工事を開始しました。工事は予定通り順調に進んでおり、平成3年5月には上棟、平成4年6月末竣工予定です。

■千里LCビルのデザイン計画について

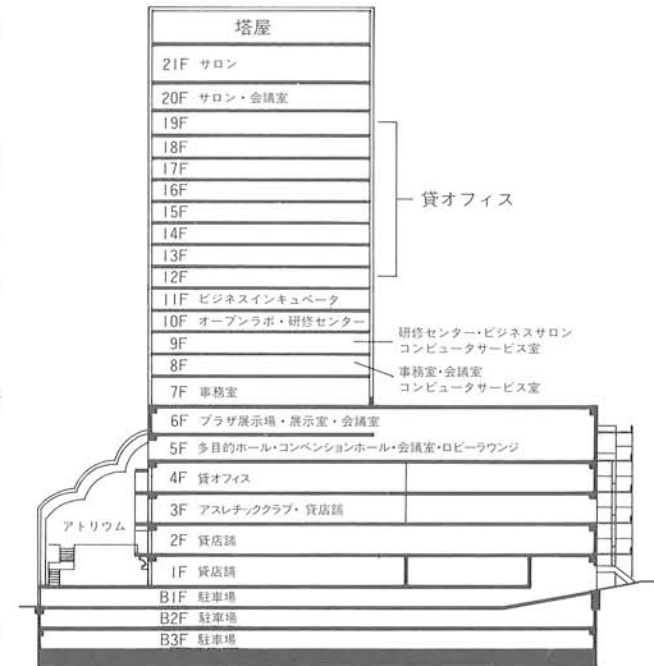
千里LCビルは最上階部分やアトリウム天井部分が特徴的な曲線でデザインされており、建物として他に見られないシンボル性を有したものになります。以下は千里LCビルのデザイン計画を簡単に紹介します。千里LCビルのデザインを考えると、立地条件、施設条件よりイメージワードを想起し、そこからデザイン面への配慮事項を検討しました。

- プロジェクトのキーワードから
ライフサイエンス…人を幸せにするための学問、横断的交流による新たな展開
●瑞々しい、「いのち」の表現
●ハイブリッド感覚の表現
- 立地条件から
千 里 ……のびやかな丘陵、自然
●周囲の自然に溶け込むフォルム
(光・風・水・緑・雲)
ニュータウン ……画一性・日常性・カジュアル、女性(ヤングミセス)の街
●ランドマークの創出
●「ハレ」の場の提供、非日常性の体験、やさしさ
- 個別施設条件から
店 舗 ……千里中央にない新しいイメージの創出、アメニティ溢れる空間の提供
●ハイグレード、ハイセンス
●アダルト、ファッショナブル、スポーティー
オフィス ……インテリジェントビル
●創造的コミュニケーション空間
●快適性・機能性の追求、リフレッシュ
リサーチコア ……学際・業際的交流、最先端技術、国際性、情報交流発信拠点
●シンボル性(ランドマーク)
●品格、格調、ハイグレード、ハイセンス

すなわち千里LCビルは「自然との対話」をキーワードとしてデザインされ、ビルの外観は自然な形、自然な流れを表現したシルエット(やさしさの表現)で「空に浮かぶ雲」の表情(雲と溶け合う建物)や「そびえ立つ樹木」(シンボリックな建物)をイメージしたもとなっています。

また、光と緑溢れるアトリウムや、ガラス、石、金属、タイル等の素材を使うことで異種材料の融合(ハイブリッド感覚)を実現するよう配慮をしています。

以上のデザイン計画により千里LCビルは建物として
①千里中央地区の新時代を象徴するとともに、国際的なライフサイエンスのセンターとしてのシンボル性
②一定の品格を保ちながら、人々に憩いとくつろぎを提供し、周辺商業施設と調和する賑わい・界限性を実現することとなります。



会社概要	
名 称	株式会社 千里ライフサイエンスセンター
事務所所在地	〒565 大阪府豊中市新千里東町1丁目4番1号 阪急千里中央ビル9F TEL06(871)5520 FAX06(871)5530
設立年月日	昭和63年3月1日
資本金	6億2千万円
出 資 者	●設立時(出資額・50音順) 大阪府、日本開発銀行、財大府府千里センター、大阪ガス、関西電力、サントリー、三和銀行、武田薬品工業、田辺製薬、日本興業銀行、阪急電鉄、大和銀行、日本生命保険 ●増資時(出資額・50音順) 塩野義製薬、藤沢薬品工業、江崎グリコ、小野薬品工業、鐘淵化学工業、(株)クボタ、(株)神戸製鋼所、三洋電機、シャープ、住友金属工業、住友友銀行、住友電気工業、積水化学工業、資酒造、ダイキン工業、大日本製薬、帝人、東洋紡績、日清食品、日東電工、松下電器産業、(株)ミドリ十字、ユニチカ、(株)鳥津製作所、住友製薬、タキロン、トバイエスベック、大日本除虫菊、ヤンマーディーゼル、日本新薬(以上43名)
総事業費	158億円

テナント募集のお知らせ

現在、(株)千里ライフサイエンスセンターはオフィス、店舗のテナント誘致計画を進めていますが、千里LCビルのオフィスまたは店舗に関心をお持ちの方は、(株)千里ライフサイエンスセンター建設部までご連絡下さい。(TEL06-871-5520)



千里百景 『竹』

千里の名は、ニュータウンの
開発とともにEXPO'70の開
催で知られるようになったが、
実は千里は知る人ぞ知る、近

畿で一、二位を競う美味しい筍の産地でもあった。白くて歯応えのある筍の秘密は、この地の酸性で粘土質の土壌によるものだ。ところで千里の竹は、日清戦争後の明治30年頃に、水利が悪く、仕事の辛い稲作の副業として京都から移植されたものであるが、昭和15年には最盛期を迎え、このあたりは「筍で持つ」と言われるほどになる。そして現代。竹林はここに住む人たちの憩いの場として親しまれ、千里は自然と都市が見事に調和する場所として注目されている。ひよつとすると千里の発展性は竹の生命力が影響しているのかもしれない。(表紙写真=千里中央駅の裏手、新千里2丁目にある「東町公園」内の風景)